

## 西洋中世の民衆宗教運動

——グルントマン以降——

小澤 実

はじめに

精神史・心性史・宗教史

(1) 定礎

(2) フランスとイタリア

(3) 英米圏

(4) 再びドイツへ

おわりに

### はじめに

8年前に遡航しよう。池上俊一は、1999年に名古屋大学出版会より大著『ロマネスク世界論』を刊行した<sup>(1)</sup>。思考、感覚、感情、霊性、想像という人間の精神活動にかかわる5つの軸から、著者がロマネスク期とみなす10世紀末から12世紀前半の西ヨーロッパ世界の動態を描き出した野心作である。この作品はその後書きから明らかなように<sup>(2)</sup>、1964年に中世人の心的世界（マンタリテ）を前面に押し出した魅力溢れる西洋中世の通史『西洋中世文明』をものしたジャック・ル・ゴフと<sup>(3)</sup>、13世紀から14世紀にかけての思想の動態を、「レグヌム *regnum*」、「サケルドティウム *sacerdotium*」、「ストウディウム *studium*」という3つの観点から理念系的に把握した『ゴシック世界の思想像』を1976年に世に問うた樺山紘一（1941-）を範としている<sup>(4)</sup>。いずれも西洋中世世界の全体像を希求したものであるが、前者のもつ心性世界への傾斜と後者のもつ構造的把握への欲求がたくみに結びついた作品として、多くの研究者のみならずロマネスク期に関心のある一般読者に読み継がれてきた<sup>(5)</sup>。

それに対し2007年に世に問われた本書『ヨーロッパ中世の宗教運動』は、前著でその道筋がたどられた5つの軸のうち霊性のみに焦点を絞り、その一方で対象とする時代をロマネスク期から一気に中世後期、著者のことばを用いるならばフランボワイアン期まで拡張した。本書で章立て

(1) 池上俊一『ロマネスク世界論』（名古屋大学出版会 1999年）。

(2) 『ロマネスク世界論』472頁。

(3) Jacques Le Goff, *La Civilisation de l'Occident médiéval*. Paris: Arthaud 1964（桐村泰次訳『中世西欧文明』論創社 2007年）。近年ル・ゴフの近著が次々に翻訳されているが、彼独特の研究の精華は1980年代以前に集中している。

(4) 樺山紘一『ゴシック世界の思想像』（岩波書店 1976年）。なお、樺山による西洋中世世界の構造的理解は、『ビジュアル版世界の歴史7 ヨーロッパの出現』（講談社 1985年）と『世界の歴史16 ルネサンスと地中海』（中央公論社 1996年 文庫版2008年）に具体的に描出されている。

(5) 本書に対する書評として、佐藤彰一『学燈』97巻2号（2000年）42-45頁；江川温『史林』83巻6号（2000年）1094-98頁；杉崎泰一郎『紀尾井史学』20号（2000年）42-47頁；同『中世思想研究』44巻（2002年）191-194頁。

られたテーマは、隠修士、カタリ派、少年十字軍、ベギン会、鞭打ち苦行団、千年王国運動と、前著のテーマ設定に比べればきわめて個別具体的な歴史現象となっている。しかしながら著者池上は、必ずしもこれらの現象を恣意的に選択し、それぞれを個別論文の集成としているわけではなく、著者の考える時代概念であるロマネスク期・ゴシック期・フランボワイアン期を代表するような民衆的活動に見える靈性のあり方に目を向けるという点で一貫している。そして表面上は突発的に見えるそれらの歴史現象が、実は時代のコンテクストに沿って歴史の流れの前面に押し出されたものであることをたびたび確認する本書の叙述姿勢は、本書の後書きで池上自身が告白するように、『西洋中世世界の崩壊』や『正統と異端』のなかで、詳細な調査によってモノグラフとしての体裁を保ちながら、なおかつ文明論的に西洋中世世界を叙述した堀米庸三(1913-75)の精神を継ぐものとして位置づけられると言えようか<sup>(6)</sup>。すなわち『宗教運動』には、宗教現象はただ宗教現象としてそこにあるのではなく、同時代の政治的社会的コンテクストの中でその独特の展開を果たし意味を持ちえたという基本的態度を、私たちは看取できる。

## 精神史・心性史・宗教史

本書『ヨーロッパ中世の宗教運動』は、その総合性とテーマの選択において日本では類書のない作品であることは間違いない。しかしながらここで、本書の学問上に位置を確かめ今後の議論の理解を深めるためにも、欧米で積み重ねられてきた中世における民衆的宗教運動のヒストリオグラフィを、私の理解する範囲において簡単に振り返っておきたい<sup>(7)</sup>。

### (1) 定礎

おそらく、この分野においてある種の指標となる研究は、1935年にドイツで公刊されたヘルベルト・グルントマン(Herbert Grundmann, 1902-70)による『中世における宗教運動』ではないだろうか<sup>(8)</sup>。当初ライプツィヒ大学で学び、文化史家カール・ランプレヒト(Karl Lamprecht, 1856-1915)の衣鉢を継いだグルントマンは、当時まだ未踏査であったフィオーレのヨアキムの研

(6) このような理解は、池上も自認している(『宗教運動』あとがき)。堀米庸三の代表的な西洋中世の通史は『中世の光と影』(文藝春秋 1967年)であるが、専門性と堀米のもつ文明論的な西洋中世世界の理解が有機的に結びついた作品として、複雑な中世後期西洋世界の政治的社会的コンテクストを、シチリア晩鐘事件を展開軸として構築した『西洋中世世界の崩壊』(岩波書店 1958年)と、グレゴリウス改革期のテクストをミクロに読み解いた『正統と異端 ヨーロッパ精神の底流』(中公新書 1964年)を挙げておきたい。

(7) なお、本書の趣旨を鑑みるならば、本来であれば民衆的宗教運動に加えて靈性についても頁を割かねばならないが、残念ながらここでその余裕はない。信仰からではなく社会科学概念としての靈性の意味内容をたどることはかならずしも容易ではない。

(8) Herbert Grundmann, *Religiöse Bewegungen im Mittelalter: Untersuchungen über die geschichtlichen Zusammenhänge zwischen der Ketzelei, den Bettelorden und der religiösen Frauenbewegung im 12. und 13. Jahrhundert und über der geschichtlichen Grundlagen der deutschen Mystik*. Berlin 1935(ただし、1967年の増補改訂版が標準版)。

究で博士号を取得したのち<sup>(9)</sup>、グレゴリウス改革の前後から澎湃として沸きあがった使徒的生活(vita apostolica)を求める全ヨーロッパ的な動きが、具体的な宗教活動として発現する13世紀までの動向を前面に押し出し、一種の民衆的宗教運動の全体像を描き出そうとした<sup>(10)</sup>。具体的にはファミリーアーティ、ワルド派、フランシスコ会の清貧観念をめぐる蹉跎や、ベギン会、托鉢修道会に併設された女性信徒団体、俗語宗教文献に見られる女性の宗教性の展開である。ドイツ特有の精神史(Geistesgeschichte)とウェーバーやトレルチが彫琢した宗教社会学の範疇において盛期中世の宗教運動を再現したこのグルントマンの著作は<sup>(11)</sup>、今なお言及するに値する研究として彼の浩瀚な論文集とともに参観され続けている<sup>(12)</sup>。英語訳は1995年になってようやく現れたが、この著作の持つ意義が薄れていないことの証左でもある<sup>(13)</sup>。

## (2) フランスとイタリア

総合的記述としてはほとんど孤立例であったように思われるグルントマンの著作だが、第2次大戦後、特にフランスとイタリアでグルントマンの精神を継承する民衆宗教史がひとつの分野を形成するまでとなった。もちろん、両国には19世紀以来、とりわけカトリック史家による個別的研究の蓄積のあったことを忘れてはならない。フランス語による『靈性事典』は、現在におけ

(9) Id., *Studien über Joachim von Floris* (Beiträge zur Kulturgeschichte des Mittelalters und der Renaissance 32). Leipzig & Berlin: B. G. Teubner 1927.

(10) 日本語で読めるグルントマンの著作は一冊のみである。Id., “Ketzergeschichte des Mittelalters.” in: Kurt Dietrich Schmidt & Ernst Wolf hrsg. *Die Kirche in ihrer Geschichte*. Bd. 2 Lief. G 1. 2 Aufl. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 1962 (今野國雄訳『中世異端史』創文社 1974)。

(11) ドイツにおける宗教学の展開に関しては、ハンス・G・キッペンベルク(月本昭男他訳)『宗教史の発見 宗教学と近代』(岩波書店 2005年)と深澤英隆『啓蒙と靈性 近代宗教言説の生成と変容』(岩波書店 2006年)が詳しい。マックス・ウェーバー(武藤一雄他訳)『宗教社会学』(創文社 1976年); エルンスト・トレルチの翻訳には、(高野晃兆・帆苺猛訳)『古代キリスト教の社会教説』(教文館 1999年)と(東京都立大学トレルチ研究会訳)「キリスト教会およびキリスト教諸集団の社会教説(1) — (17)」『東京都立大学法学会雑誌』29巻2号-43巻2号(1988-2003年)の2つがあるが、後者は中世該当部も訳している。

(12) Herbert Grundmann, *Ausgewählte Aufsätze* (Schriften der MGH 25), 3 Bde. Stuttgart: Hierseman 1976-78.

(13) Herbert Grundmann, *Religious Movements in the Middle Ages: The Historical Links Between Heresy, the Mendicant Orders, and Women's Religious Movement in the Twelfth and Thirteenth Century, with the Historical Foundations of German Mysticism*. Introduction by Robert E. Lerner, Notre Dame, Ind: Notre Dame UP 1995. イントロダクションを付したロバート・ラーナーはグルントマンに師事したアメリカの中世史家。自由心靈派研究の重鎮である(Robert E. Lerner, *The Heresy of the Free Spirit in the Later Middle Ages*. Berkley: California UP 1972)。彼は戦間期ドイツ語圏で公刊された6つの卓抜した中世史文献のひとつとして本書を挙げている。残りの5つは、Ernst Kantorowicz, *Kaiser Friedrich II*. Berlin: G. Bondi 1927; Percy Ernst Schramm, *Kaiser, Rom und Renovatio: Studien zur Geschichte des römischen Erneuerungsgedankens von Ende des karolingischen Reiches bis zum Investiturstreit*. Leipzig: Teubner 1929; Carl Erdmann, *Die Entstehung des Kreuzzugsgedankens*. Stuttgart: Kohlhammer 1935; Gerd Tellenbach, *Libertas: Kirche und Weltordnung im Zeitalter des Investiturstreits*. Stuttgart: Kohlhammer 1936; Otto Brunner, *Land und Herrschaft: Grundfragen der territorialen Verfassungsgeschichte Sudostdeutschlands im Mittelalter*. Baden bei Wien: Röhrer 1939である。残念ながら日本では、オットー・ブルンナーを除けば、ほとんど紹介すらされていない。

る——項目執筆者は一国の中に閉じられているわけではないが——靈性研究の水準の表出でもある<sup>(44)</sup>。他方でエミル・デュルケムやレヴィ・ブルジュールのフランス流古典的社会科学の系譜も研究の流れに影響を与えているだろう<sup>(45)</sup>。しかしながら、アナール派の提唱する全体史やドイツ史学で盛んに唱導されるようになった社会構造史が、宗教現象をより一般的な文脈の中で解釈する動きに拍車をかけ、方法論においても対象においても従来とは一線を画す研究を生み出したことは銘記しておくべきである<sup>(46)</sup>。イタリアのラウル・マンセッリ (Raoul Manselli, 1917–84) の『中世における民衆宗教』や<sup>(47)</sup>、フランスのエティエンヌ・ドラリュエル (Étienne Delaruelle, 1904–71) による『中世における民衆信仰』<sup>(48)</sup>、そしてアンドレ・ヴォシエ (André Vauchez, 1938–) の『西洋中世の靈性』などは<sup>(49)</sup>、その最たる例であろう。いずれも池上の著作と同様に民衆の靈性に注目し、修道会ごとに蓄積されていた個別研究を総合叙述のレヴェルにまで高めた名著である<sup>(50)</sup>。また、靈性史というわけではないが、異端審問記録を用いることで中世後期から近世にかけての特定コミュニティにおける、正統信仰からは距離のある民衆の世界観を再現したジャック・ル・ゴフ<sup>(51)</sup>、カルロ・ギンズブルク (Carlo Ginzburg, 1939–)<sup>(52)</sup>、エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリ (Emmanuel Le

(44) M. Viller et alii ed. *Dictionnaire de spiritualité, ascétique et mystique*. 16 tom. Paris 1937–95.

(45) フランス宗教研究の流れを巧みにまとめているのは、ジャン・ポール・ヴィレーム (林伸一郎訳) 『宗教社会学入門』(白水社クセジュ 2007年)である。そこでは戦後に活躍した宗教社会学者にしてカノン法史家であるガブリエル・ル・ブラ (Gabriel Le Bras, 1891–1970) の存在に注意が払われている。

(46) フランスの宗教心性史の開祖は、Lucien Febvre, *Le problème de l'incroyance au XVI<sup>e</sup> siècle : la religion de Rabelais*. Paris: Albin Michel 1942 (『ラブレールの宗教 16世紀における不信仰の問題』法政大学出版局 2003年)。

(47) Raoul Manselli, *La religion populaire au moyen âge: problèmes de méthode et d'histoire*. Montreal: Institut d'études médiévales Albert-le-Grand 1975 (大橋喜之訳『西欧中世の民衆信仰 神秘の感受と異端』八坂書房 2002年)。

(48) Étienne Delaruelle, *La piété populaire au Moyen Age*. Torino: Bottega d'Erasmus 1980. この論文集は、フィリップ・ヴォルフが序文を準備し、ラウル・マンセッリとアンドレ・ヴォシエがイントロダクションを執筆している。

(49) André Vauchez, *La spiritualité du moyen âge occidental VIII<sup>e</sup>-XII<sup>e</sup> siècle*. Paris 1975.

(50) 修道会に関するきわめて便利なハンドブックとして、André Vauchez & Cécile Caby ed. *L'histoire des moines, chanoines et religieux au moyen âge : Guide de recherche et documents* (L'atelier du médiéviste 9). Turnhout: Brepols 2003.

(51) ル・ゴフはフランスにおける歴史人類学の開拓者でもあるが、そのような関心に基づく代表的なモノグラフとして、Jacques Le Goff, "Culture ecclésiastique et culture folklorique au moyen âge. Saint Marcel de Paris et le dragon." in: L. De Rosa ed. *Ricerche storiche ed economica in memoria di Corrado Barbagallo*, vol. II. Napoli: ESI 1970, pp. 51–90 (『中世の教会文化と民俗文化 パリの聖マルセルと龍』ジャック・ル・ゴフ (加納修訳) 『もうひとつの中世のために 西洋における時間、労働、そして文化』(白水社 2006年) 271–323頁)。

(52) Carlo Ginzburg, *I benandanti: storegoneria e culti agrari tra cinquecento e seicento*. Torino: Einaudi 1966 (竹山博英訳『ベナンダンティ 16–17世紀における悪魔崇拝と農耕儀礼』せりか書房 1986年); Id., *Il formaggio e i vermi: il cosmo di un mugnaio del '500*. Torino: Einaudi 1976 (杉山光信訳『チーズとうじ虫 16世紀の一粉挽屋の世界像』みすず書房 1984年); Id., *Storia notturna: una dicifrazione del sabba*. Torino: Einaudi 1989 (竹山博英訳『闇の歴史』せりか書房 1992年)。

Roy Ladurie, 1929-) <sup>(23)</sup>、ジャン・クロード＝シュミット (Jean Claude-Schmitt, 1946-) <sup>(24)</sup> の存在も大きい。彼らは人類学や民俗学が培ってきた人間社会の把握手法に学び、ヨーロッパ社会の基層の再現に構造性と時間軸を導入することで、歴史人類学や歴史民俗学という分野を確立した。方法的な困難を認めながらも中世民衆のマンタリテに迫ろうとするその態度は、グルントマンとは異なる方向性で宗教運動の総合的叙述の可能性を私たちに提示してくれたといえる <sup>(25)</sup>。

### (3) 英米圏

他方、英米圏でも宗教現象に注目する研究が陸続と刊行された。この英米圏は大陸と比べると、現実世界における社会的関心がそのまま研究分野の隆盛に結びついているように思われる。イギリスでは社会における少数者への眼差しという観点から異端史研究が、アメリカではフェミニズム運動やジェンダー意識の高まりという観点から女性史研究が目にとまる。

イギリスに関しては、戦後の早い段階でのノーマン・コーン (Norman Cohn, 1915–2007) のプレゼンスの大きさを感じ取ることができる <sup>(26)</sup>。霊性という定義の難しい概念を中心に据えるわけではなく、前近代社会における社会集団の動態の再現を図るその態度は、俯瞰的理解を図る英国流の宗教社会学もしくは宗教人類学の系譜に連なっているようでもある。その後も中世末期から近世初頭にかけての民衆宗教運動をクローズアップした研究として、ピーター・バーク (Peter Burke, 1937-) の『ヨーロッパの民衆文化』<sup>(27)</sup> やキース・トマス (Keith Thomas, 1933-) の『宗教と魔術の衰退』<sup>(28)</sup> が、日本を含めた学術界にインパクトを与えた。他方、異端という観点から、ゴードン・レフ (Gordon A. Leff) の『中世末期の異端』やマルコム・ランバート (Malcolm Lambert) の『中世の

<sup>(23)</sup> Emmanuel Le Roy Ladurie, *Montaillou, village occitan de 1294 à 1324*. Paris: Gallimard 1975 (井上幸治・渡邊昌美訳『モンタイユー ピレネーの村 1294–1324』2冊 刀水書房 1990–91年)。

<sup>(24)</sup> とりわけスイス社から1988年に出版された『フランス宗教史』からの部分訳である、松村剛訳『中世の迷信』(白水社 1998年)を参照。

<sup>(25)</sup> とくに初期中世の異教的残余に関しては次の研究書も大いに参考になる。Ludo Milis ed. *The Pagan Middle Ages*. Woodbridge: Boydell & Brewer 1998 (武内信一訳『異教的中世』新評論 2003年)。

<sup>(26)</sup> ノーマン・コーンの3部作は、Norman Cohn, *The Pursuit of the Millennium: Revolutionary Millenarians and Mystical Anarchists of the Middle Ages*. London: Secker & Warburg 1957 (江河徹訳『千年王国の追求』紀伊国屋書店 1975年) ; Id., *Warrant for Genocide: The Myth of the Jewish World Conspiracy and the Protocols of the Elders of Zion*. London: Eyre & Spottiswoode 1967 (内田樹訳『シオン賢者の議定書 ユダヤ人世界征服陰謀の神話』ダイナミックセラーズ 1986年) ; Id., *Europe's Inner Demons: An Inquiry inspired by the Great Witch-Hunt*. London: Chatto 1975 (山本通訳『魔女狩りの社会史 ヨーロッパの内なる悪魔』岩波書店 1983年)である。そのほかに、Id., *Noah's Flood: The Genesis Story in Western Thought*. New Haven: Yale UP 1996 (浜林正夫訳『ノアの大洪水 西洋思想の中の洪水の物語』大月書店 1997年)がある。

<sup>(27)</sup> Peter Burke, *Popular Culture in Early Modern Europe*. Cambridge: Cambridge UP 1978 (中村賢二郎・谷泰訳『ヨーロッパの民衆文化』人文書院 1988年)。

<sup>(28)</sup> Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic: Studies in Popular Beliefs in Sixteenth and Seventeenth Century England*. London: Weidenfeld & Nicolson 1971 (荒木正純訳『宗教と魔術の衰退』法政大学出版局 1993年)。

異端<sup>(29)</sup>といったスタンダード・ワークが<sup>(30)</sup>、今なお版を重ね読み継がれている。近年のひとつの総合として注目されるのが、『民衆異端の誕生』の著者であるロバート・ムーア (Robert I Moore, 1941-) による『迫害社会の形成』である<sup>(31)</sup>。ムーアは異端にとどまることなくユダヤ人やハンセン氏病者のように同時代の視線において社会不和の原因とみなされた集団を総合的に扱っており、その射程は異端研究を包摂してさらにその先へと進んでいる。

他方、長年アメリカの靈性史研究をリードしてきたのは、シカゴ大学のバーナード・マッギン (Bernard McGinn, 1937-) とプリンストン高等研究所名誉教授であるジャイルズ・コンスタブル (Giles Constable, 1935-) である。前者はミルチア・エリアーデやが籍を置いた宗教学シカゴ学派の系譜を引く終末思想と神秘主義の専門家であり<sup>(32)</sup>、西洋神秘主義に関する長大な通史である『神の現前』にくわえて<sup>(33)</sup>、エックハルトやフィオーレのヨアキム等に重要な業績を残している<sup>(34)</sup>。前世紀から今世紀にかけてアメリカでは数多くの終末論研究が出版されたが、マッギンは初期中世における終末思想の中心的研究者であるリチャード・ランデス (Richard Landes) とともにその牽引者でもあった<sup>(35)</sup>。コンスタブルは、修道院十分の一税の研究<sup>(36)</sup>と尊者ペトルスの書簡の編纂を手

(29) Gordon Leff, *Heresy in the Later Middle Ages*. 2 vols. Manchester: Manchester UP 1967. レフの基本的な見解は、短いながら日本語で読むことができる。森田安一訳「異端 (中世における)」『西洋思想事典』第1巻 (平凡社 1990年) 111-18頁、泉治典訳「預言 (中世における)」『西洋思想事典』第4巻 (平凡社 1990年) 487-93頁。

(30) Malcolm Lambert, *Medieval Heresy: Popular Movements from the Gregorian Reform to the Reformation*. 3 ed. Oxford: Blackwell 2003 (1 ed. 1977).

(31) Robert I. Moore, *The Formation of a Persecuting Society: Authority and Defiance in Western Europe 950-1250*. 2 ed. Oxford: Longman 2007. ムーアの著作はいずれもヨーロッパ社会の形成期に力点が置かれており、社会形成とのかかわりで異端をとらえるという点において興味深い。Robert I. Moore, *The Birth of Popular Heresy*. 2 ed. Toronto: Toronto UP 1995 (1 ed. 1975); Id., *The Origin of European Dissent*. Oxford: Blackwell 1985; Id., *The First European Revolution c.970-1215 (Making of Europe)*. Oxford: Blackwell 2000.

(32) 宗教学シカゴ学派に関しては、その創始者であるヴァッハの、ヨアヒム・ヴァッハ (渡辺学他訳) 『宗教の比較研究』(法蔵館 1999年) や、奥山倫明 『エリアーデ宗教学の展開 比較・歴史・解釈』(刀水書房 2000年) を参照。エリアーデに関しては特に、佐藤慎太郎 「エリアーデ宗教学とその学問的営為——聖なるものの探求と西洋近代——」 『宗教研究』79巻3号 (2005年) 73-94頁; 鶴岡賀雄 「エリアーデ・レリギオースス——あるいは永劫回帰の宗教史——」 島蘭進・鶴岡賀雄編 『〈宗教〉再考』(ペリかん社 2004年) 112-39頁。

(33) Bernard McGinn, *The Presence of God: A History of Western Mysticism*. 4 vols. New York: Crossroad 1991-2005.

(34) Bernard McGinn, *The Calabrian Abbot: Joachim of Fiore in the History of Western Thought*. New York: Macmillan 1985 (宮本直子訳 『フィオーレのヨアキム 西欧思想と黙示的終末論』平凡社 1997年); Id., *The Mystical Thought of Meister Eckhart: The Man from whom God Hid Nothing*. New York: Crossroad 2001.

(35) Bernard McGinn, *Antichrist: Two Thousand Years of the Fascination with Evil*. San Francisco: Harper 1994 (松田直成訳 『アンチキリスト 悪に魅せられた人類の二千年史』河出書房新社 1998年); Bernard McGinn, John J. Collins & Stephen J. Stein eds. *The Encyclopedia of Apocalypticism*. 3 vols. New York: Continuum 1998; Id. eds. *The Continuum History of Apocalypticism*. New York: Continuum 2003.

(36) Giles Constable, *Monastic Tithes: from their Origins to the Twelfth Century* (Cambridge Studies in Medieval Life and Thought, N. S. 10). Cambridge: Cambridge UP 1964.

始めとして<sup>37)</sup>、クリュニー会の活動を中心に初期中世からルネサンスに至るまでの宗教活動を幅広く扱っている<sup>38)</sup>。代表作は12世紀における靈性活動のうねりをさまざまな側面から論じた『12世紀改革』と『中世の宗教ならびに社会思想に関する3つの研究』であろう<sup>39)</sup>。著者自身がその序文で述べている通り、合計すると900ページ近くに上るこの2つの作品は内容面において補いあう関係にある。文飾鮮やかな大陸の研究者に比べれば淡々とした筆致だが、宗教社会学的なパースペクティブを持ち、鬼面をして人を驚かすというよりは豊富な具体例に訴えることで読者を説得する格好である。隠修士の靈性著作をかなり利用しているという点では池上の著作と重なる。

すでに述べたように、近年のアメリカの傾向として注目すべきは、宗教的側面に注目した女性史研究の質的ならびに量的向上である<sup>40)</sup>。2人の名前だけ挙げておきたい。1人はプリンストン高等研究院におけるコンスタブルのポスト継承者でもあるキャロライン・バイナム (Caroline Walker Bynum, 1941-)、もう1人は現在シカゴ大学で教鞭をとるレイチェル・フルトン (Rachel Fulton) である。前者は中世における女性の身体と靈性との関係の究明を目的とし、着眼点もさることながらその文献学的精査という点で、アメリカのアカデミズムに居並ぶ女性史研究者のなかでも群を抜いている<sup>41)</sup>。バイナムの教え子でもある後者は、師が深くは追求することのなかったポスト・カロリング期から盛期中世以前にかけての靈性、とりわけ聖母マリアに関する研究を聖書注釈という観点から、精緻な論文を次々に刊行している<sup>42)</sup>。両者はいずれも民衆というよりは、池上の観点からいえば「エリート」と言える教会人や修道士のテキストを中心に作品を構成しているが、靈

<sup>37)</sup> Giles Constable ed. *The Letters of Peter the Venerable*. 2 vols. Cambridge, Mass.; Harvard UP 1967.

<sup>38)</sup> コンスタブルのモノグラフのほとんどは次の4冊の論文集に収録されている。Giles Constable, *Religious Life and Thought (11–12th Centuries)*. London: Variorum 1979; Id., *Clunian Studies*. London: Variorum 1980; Id., *Culture and Spirituality in Medieval Europe*. London: Variorum 1996; Id., *Cluny from the Tenth to the Twelfth Centuries*. Ashgate: Variorum 2000.

<sup>39)</sup> Giles Constable, *Three Studies in Medieval Religious and Social Thought*. Cambridge: Cambridge UP 1995; Id., *The Reformation of the Twelfth Century*. Cambridge: Cambridge UP 1996. コンスタブルは影響を受けた歴史家として、フランスのジャン・ルクレール (Jean Leclercq, 1911–93)、イギリスのデヴィッド・ノールズ (David M. Knowles, 1896–1971)、ドイツのカッシウス・ハリンガー (Kassius Hallinger, 1912–91) の名前を挙げている。いずれも修道士経験をもつ修道院靈性研究の開拓者であるが、必ずしも民衆靈性を追求したというわけではない。

<sup>40)</sup> 中世における宗教史研究のアンソロジーに、Constance Hoffman Berman ed. *Medieval Religion: New Approaches*. New York: Routledge 2005 がある。編者も含めて執筆者のかなりを女性が占める。

<sup>41)</sup> バイナムの著書はかなりの数に上るが、Caroline W. Bynum, *Jesus as Mother: Studies in the Spirituality in the High Middle Ages*. Berkeley: University of California Press 1982; Id., *Fragmentation and Redemption: Essays on Gender and the Human Body in Medieval Religion*. New York: Urzone Publishers 1987; Id., *Wonderful Blood: Theology and Practice in Late Medieval Northern Germany and Beyond*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press 2007. なお池上による『魔女と聖女 ヨーロッパ中近世の女たち』(講談社現代新書 1992年)は、バイナムの議論に触発されて執筆されたことがその冒頭で述べられている。

<sup>42)</sup> 代表作として、Rachel Fulton, *From Judgment to Passion: Devotion to Christ and the Virgin Mary 800–1200*. New York: Columbia UP 2002. なお、マリア研究に関しては、日本語でも良書を手にすることができる。Klaus Schreiner, *Maria. Jungfrau, Mutter, Herrscherin*. München: Carl Hanser 1994 (内藤道雄訳『マリア 処女・母親・女主人』法政大学出版局 2000年); Jaroslav Perikan, *Mary through the Centuries. Her Place in the History of Culture*. New Haven, Con.: Yale UP 1996 (関口篤訳『聖母マリア』青土社 1998年).

性の担い手である女性の存在をクローズアップするという点では『宗教運動』と通じるものがある。いずれも日本ではほとんど紹介されていないが、西洋中世の宗教史にジェンダーという視点を効果的に持ち込んだ研究者として、今後とも注意が払われるべきだろう<sup>(43)</sup>。

#### (4) 再びドイツへ

近年のドイツ語圏では、フランスやイタリアそして英米圏とも異なる方向で、再び宗教運動の研究が隆盛の兆しを見せているようにも思われる。ミュンスター大学には初期中世研究の牙城である「初期中世研究所」が1967年に創設され、爾来その機関誌である『初期中世研究 *Frühmittelalterliche Studien*』とともに旺盛な研究活動を展開している。1970年代を中心に、ゲルト・テレンバッハ (Gerd Tellenbach, 1903-99) の門下生による初期中世における死者記念碑 (Necrologium) の研究が一世を風靡したが、その研究潮流に寄り添うように教会史の立場から宗教性研究を推し進めたのがアルノルト・アンゲネント (Arnold Angenendt, 1934-) である。彼は畢生の大著である『中世における宗教性の歴史』と<sup>(44)</sup>、主としてドイツ語圏における宗教心性研究をサーヴェイしたハンディな『中世における宗教心性の基本形態』の著者として夙に有名である<sup>(45)</sup>。初期中世の典礼研究を専門とするアンゲネントは、キリスト教研究の中で積み重ねられてきた典礼学の成果を一般史に還元することにより、厚みのある歴史研究にいまなお健筆をふるっている。他方、ドイツ語圏における中世後期の宗教心性研究の泰斗はペーター・ディンツェルバッハー (Peter Dinzelbacher, 1948-) だろう。幻視研究によって学位を取得したディンツェルバッハーは<sup>(46)</sup>、主として文学文献によりながら、神秘主義、霊性、心性に関して膨大な数の研究文献を公刊している<sup>(47)</sup>。文献学的でありながらもジェンダー規範を意識したその研究姿勢は、その先進地である英米圏においても受容されているように見える。

(43) 女性の霊性に注目したシリーズとして、ボイデル社の *Studies in Medieval Mysticism* とブレポルス社の *Medieval Women: Texts and Contexts* がある。後者の一冊として、ベギン運動を扱った論文集である、J. Dor et al. eds. *New Trends in Feminine Spirituality: The Holy Women of Liège and their Impact*. Turnhout: Brepols 1999 を挙げておきたい。

(44) Arnold Angenendt, *Geschichte der Religiosität im Mittelalter*. Darmstadt: Primus 1997.

(45) Id., *Grundformen der Frömmigkeit im Mittelalter* (Enzyklopädie deutscher Geschichte 68). München: Oldenbourg 2003.

(46) Peter Dinzelbacher, *Vision und Visionsliteratur im Mittelalter* (Monographien zur Geschichte der Mittelalters 23). Stuttgart: Hiersemann 1981.

(47) Id., *Religiosität und Mentalität des Mittelalters*. Klagenfurt: Kitab 2003; Id., *Christliche Mystik im Abendland: ihre Geschichte von den Anfängen bis zum Ende des Mittelalters*. Paderborn: F. Schöningh 1994; Peter Dinzelbacher hrsg. *Wörterbuch der Mystik*. Stuttgart: Kröner 1989 (植田兼義訳『神秘主義事典』教文館 2000年)。彼の編集による中世修道院の概観も翻訳された。Peter Dinzelbacher & James Lester Hogg hrsg. *Kulturgeschichte der christlichen Orden in Einzeldarstellungen*. Stuttgart: Kröner 1997 (朝倉文市監訳『修道院文化史事典』八坂書房 2008年)。



## おわりに

以上のような宗教運動研究の潮流の中であって、池上俊一による本書は、なお独特の位置を占めているように思われる。それは最初にも述べたように、『宗教運動』が従来の民衆宗教運動史や靈性史のコンテクストの中に位置づけられると同時に、日本独特の歴史学コンテクストの中で生み出されたものであるからに他ならない。〈靈性〉、〈民衆〉、〈隠修士〉といった池上一流の基本概念の設定と具体例の選択はその最たる例でもあろう。その詳細はコメンテータが、それぞれの視点と関心に従って明らかとしてくれるだろう<sup>(48)</sup>。

---

<sup>(48)</sup> なお、小澤実、鶴岡賀雄、杉崎泰一郎、赤江雄一、池上俊一の共著である「池上俊一『ヨーロッパ中世の宗教運動』(名古屋大学出版会 2007年)をめぐって」と題した論考が『歴史学研究』に近日掲載予定である。この論考は、本論集に掲載した合評会当日の発表原稿とは異なり、論点を歴史叙述と歴史概念の問題に絞った上で、合評会以降に交わされた議論も踏まえて書かれた新稿である。あわせて参照されたい。